

日本産業衛生学会東海地方会

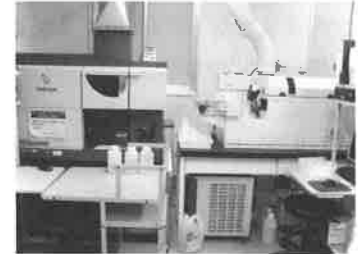
地方会ニュース

発行所 東海地方会ニュース編集事務局
〒 480-1195
愛知県愛知郡長久手町大字岩作字雁又 21
愛知医科大学医学部衛生学講座
電話 (0561) 62-3311
FAX (0561) 63-8552
発行責任者 小林 章雄

(題字 皿井 進筆)



静岡県産業環境センター分析棟



ISO/IEC17025 認定用 ICP と ICP/MS



ダイオキシン類分析用高分解能 GC/MS

■■■ 測定士の質 (Quality) ■■■

土屋真知子 (社) 静岡県産業環境センター顧問



弊社が測定業務を開始した昭和 47 年の頃は、写真のような ICP/MS や GC/MS はまだありませんでした。当時の分析室には原子吸光光度計、吸光光度計程度しかなく、有害物質の測定は常に妨害物質との戦いでした。従って有害物質による労働災害等の原因調査や再現実験の時は常に幾ばくかの不安が残ったものです。しかし見方を変えれば、このような環境下であったからこそ、調査技術の力量を身に付けることが出来た貴重な経験であったと言えます。

さて、昭和 51 年の労安衛法改正により作業環境測定が義務化され、現場の環境は徐々に低濃度に抑制されるようになりました。測定士は作業環境の空間的・時間的変動を測ることに特化する時代を迎えたこととなります。物質によっては管理濃度が厳しくなり、測定方法もそれに対応すべく高性能分析機器 (高速液クロ、GCMS、ICP/MS、FTIR 等) が導入されました。測定分析の標準化が進み精度管理は格段に向上した訳ですが、結果的には業務の分業化をもたらすこととな

りました。

プロとはどのような人のことでしょうか。1987 年の世界医師会マドリッド宣言で、プロフェッショナル・オートノミー (professional autonomy) という言葉が使われています。本来の意味は「自律して自己決定する」ことらしいですが、これを引用すれば、労働衛生の測定分野でプロと言えるのは、有害物質の必要な濃度レベルを得るために、測定手法を独自で企画・検証し問題提起できる人のことではないでしょうか。

近年、ナノマテリアルの導入など産業界の技術革新は目覚しく、衛生管理面では、物質の有害性はその要因が化学的性質のみならず極微細物質の物理的性状が起因するのではと新たな問題が危惧されているところです。分業化を余儀なくされて日常の測定業務に追われる測定士は果たしてこのままで professional autonomy の仕事出来るのでしょうか。リスクアセスメントが努力義務化された今、「作業環境管理」の重要な担い手である測定士にプロとしての質 (Quality) が問われていると思います。

平成 21 年度日本産業衛生学会東海地方会学会開催報告

平成 21 年 11 月 14 日（土）に名古屋市立大学医学研究科・医学部研究棟で、今年度東海地方会学会が名古屋市立大学上島通浩教授を学会長として開催された。名市大での開催は決まっていたものの、学会長未定のままかなりの時間が過ぎていたが、今年度初めに就任したばかりの上島教授の陣頭指揮で、準備期間が短い中、規模、内容ともに充実した地方会学会になり、活発な討論が行われた。

午前には口演発表が行われた一般演題は 21 題、午後には特別講演とシンポジウムが行われ、特別講演は名古屋大学大学院法学研究科の和田肇教授が「今雇用の現場で起きていること—法学者から見た現在の雇用の現状と課題—」と題して、社会科学の立場から現在の雇用情勢、働く人々をめぐる状況について話した。続いて行われたシンポジウムで「産業保健課題としての

肥満の成因・病態と予防」をテーマに 3 人のシンポジストとともに指定発言を交えて討論が行われた。シンポジストは職場の現状と取り組みを中心に「肥満者の就労における課題と対応」と題して金一成（トヨタ自動車（株））、職場をフィールドとした疫学研究成果を交え、「職域集団から学ぶ肥満の成因と健康影響」と題して豊嶋英明（名大名誉教授）、最近話題になっている肝臓疾患に焦点を当てて、「非アルコール性脂肪性肝炎の分子メカニズムと予防」と題して那須民江（名大教授）、指定発言として肥満とストレス要因の解析結果を示し「肥満の作業関連性」と題して西谷直子（東レ（株）愛知）の各氏が話題提供を行った後、質疑討論が行われた。参加者は 172 名（会員 116 名・非会員 44 名・学生 11 名）。



和田肇教授（名大院法）



金一成医師（トヨタ自動車（株））



豊嶋英明名誉教授（名大）



那須民江教授（名大院医）



西谷直子保健師（東レ（株））



シンポジウム「産業保健課題としての肥満の成因・病態と予防」



特別講演「今雇用の現場で起きていること」



一般口演（B会場）

研究会・部会開催報告

第 4 回産業歯科部会研修会

日 時：2009 年 11 月 7 日 (土) 18:30 ~ 19:30
 場 所：名古屋ガーデンパレス
 講 演：これからの産業保健
 講 師：柴田英治 (愛知医大医衛生)
 参加者：9 名

第 76 回職場ストレス研究会

日 時：2009 年 11 月 10 日 (火) 14:00 ~ 16:00
 場 所：明倫ホール
 講 演：地域・職域につなげる自殺予防
 木村仁 (愛知医大医精神科講師)
 参加者：63 名

学術連携研究会企画 教育講演

日 時：2009 年 11 月 14 日 (土) 17:00 ~ 18:00
 場 所：名古屋市立大学
 医学研究科・医学部研究棟講義室 A
 講 演：産業保健におけるフィールド研究の役割
 一現場と大学・研究機関の連携に向けて—
 柴田英治 (愛知医大医衛生)
 追加発言：遠田和彦 (JR 東海静岡)
 参加者：43 名

東海産業衛生技術部会第 1 回特別講演会

これからの環境管理のあり方・考え方

日 時：2009 年 12 月 19 日 (土) 13:00 ~ 16:00
 場 所：中部大学名古屋キャンパス 610 教室
 講演 1 ペンチマーク法による限界濃度評価と利用法
 村田勝敬 (秋田大医環境保健)
 講演 2 管理濃度とリスク管理
 中明賢二 (麻布大学)
 参加者：27 名

産業保健の新しい動き

振動障害予防対策の 新しい厚生労働省通達について

榊原久孝 (名古屋大学医学部保健学科)

昨年 (2009 年) 7 月に、1975 年の振動障害予防対策指針が 34 年ぶりに改訂された (「チェーンソー取扱い作業指針について (平成 21 年 7 月 10 日付け基発 0710 第 1 号)」「チェーンソー以外の振動工具の取扱い業務に係る振動障害予防対策指針について (基発 0710 第 2 号)」「振動工具の「周波数補正振動加速度実効値の 3 軸合成値」の測定、表示等について (基発 0710 号第 3 号)」。これは近年欧州で EU 機械指令 (98/37/EC) や EU 振動指令 (2002/44/EC) が施行され、振動障害予防のための作業管理を含めた包括的な対策が進められてきたことの反映でもある。

工具の振動レベルの表示は、今回新しく導入された内容である。EU 機械指令でも、工具振動レベルの表示を課しており、欧州諸国へ振動工具を輸出する場合には、日本企業でも振動レベルの表示が求められている。振動レベルの表示により、工具の振動レベルが把握可能となり、工具使用によるリスク評価の基礎となる。また、低振動工具の選択が容易になることで、低振動工具の普及とともに、低振動工具の開発促進につながる事が期待される。

次いで、振動レベルに応じた振動障害予防のための作業管理である。これまで 1 日 2 時間などの一律の使用時間規制が指針とされていたが、新しい指針では工具の振動レベルに応じた作業時間管理が基本となっている。EU 振動指令に準じて、日振動暴露量 A(8) を、 5.0m/s^2 の暴露限界値以下に管理し、 2.5m/s^2 の暴露対策値への低減努力をあげている。そして振動工具使用職場では、振動レベルに応じた作業計画書の作成が言われている。

今回の指針は国際的な振動障害予防対策の動向を反映した改訂となっている。新しい指針の普及により、振動工具使用の際には、振動レベルの表示から工具振動レベルを把握し、それに応じたリスクアセスメントによる作業時間管理などの予防対策が進むことが期待される。

新春随想

寅年に寄せて

足立留美子 (パナソニック EV エナジー)



平成 22 年の新春を迎え、謹んで新年のお慶びを申し上げます。今年もよろしく願いいたします。昨年は、百年に一度とも言われる不況下で年明け

を迎え、雇用問題への発展、その後は新型インフルエンザの流行と産業保健に携わる私たちの仕事にも大きな影響があった 1 年でした。

さて、今年は寅年です。十二支の三番目にあたる寅年は、春が来て草木が発生する状態を表しているそうです。十二支の一番目の子年は活発に種をまく年、次の丑年はまいた種が芽を出し成長するものを忍耐強く見守る年、そして、今年の寅年は芽が勢いよく伸びはじめる年だとされています。

私事ですが、パナソニック EV エナジー(株)の産業医になってちょうど 3 年目を迎えます。弊社は創業して 14 年目になりますが、私が入社した時期に健保組合の変更等があり、新たな健康管理システムを立ち上げることになりました。健康管理室は、新築したての素晴らしいものでしたが、産業医は私 1 人、他の産業保健スタッフ 2 名も入社 2 年未満という中で、パナソニック EV エナジー(株)の健康管理室の種まきははじまりました。定期健康診断システムの変更に加え、特定健康診査とそれに基づく特定保健指導の導入時期が重なり、健診機関・健保、および社内での調整をしながら、通常健康管理業務をこなすという 1 年でした。2 年目の昨年は、新しく導入した健康診断システムの芽が出たことを見るのができほっと安堵しましたが、しっかりと成長するためにこまめに PDCA サイクルを回すという水や肥料をかかさず与える年になりました。いよいよ 3 年目の今年は、文字通りその芽が勢いよく伸びはじめる年になることを願っています。従業員数、事業所の増加もあり、その芽から元気に枝葉が分かれていけるような道筋をつける必要もあると考えています。そして、この健康管理システムの芽が太陽に向かってまっすぐ伸び、従業員が元気に明るく楽しく働ける職場作りに少しでも役に立てればと思っております。

寅年は、12 ヶ月に当てはめると三月、少しでも春のあたたかな陽気と新しい息吹を感じられる年になることが願ってやみません。

自己紹介とご挨拶

伊藤由起 (名古屋市立大学大学院医学研究科環境保健学)



地方会会員の皆様、新春のお喜びを申し上げます。名古屋市立大学 大学院医学研究科 環境保健学の伊藤と申します。私のことをご存知ではない諸

先輩方が多数いらっしゃいますので、僭越ながら自己紹介を兼ねてご挨拶申し上げたいと思います。

私のバックグラウンドは臨床検査です。大学生の頃、当時名大保健学科にいらっしゃった現愛知医大の柴田先生が時々アルバイトを紹介してくださいました。名大衛生学教室にあった産業衛生学会の地方会事務局のお手伝いでした。このアルバイトは普段私たちがしていたアルバイトよりも割がよく人気がありました。早い者勝ちの為、先を競って申し込んでいたのを覚えております。これで味をしめて(?)、当時名大衛生学の講師であった上島先生のご指示のもと、有機溶剤中毒症例データベース作成のお手伝いもさせていただきました。こちらは中毒データの入力予想よりはるかに大変で、割のいいバイトとは言えませんでした。この経験が私を産業衛生学、中毒学にいざなってくれたのではないかと思います。

その後、修士から名大の環境労働衛生学教室の門を叩きました。私の研究内容は産業衛生学というよりは環境衛生学でしたが、那須教授をはじめ日本産業衛生学会所属の諸先生方に温かくご指導していただきました。学位取得後名大の男女共同参画室に勤務し、保育所の設置等の職場環境整備や理系進学推進活動、女性研究者・女性医師のキャリア継続支援等を行ってきました。仕事内容は一見すると研究とはほど遠いのですが、大学という職場環境の改善、作業管理という点で、産業衛生学の一端だと言えます。

昨年 6 月より前述の通り、名市大に異動いたしました。研究室を主宰するのは、私が産業衛生学を学ぶきっかけとなったアルバイトでお世話になった上島先生です。非常に不思議な縁だと感じています。現在上島教授の下、教授着任後まだ 1 年弱の新しい研究室の活性化のため助教として日々奔走しております。学生の将来のキャリアの選択肢の 1 つとして産業衛生学の道を指南していければと思っております。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

初心？

北村文彦 (三重大学大学院医学系研究科公衆衛生・産業医学分野)



柴田先生より新年号にテーマは自由で思っていることを書くようにとのご依頼があり、はたと何を書くべきかと悩みました。新年となれば、抱負など発展的な話題をと考えていたのですが、なかなか思い浮かばず最近ずっと頭をよぎることについて触れさせていただきたいと思います。

それは自分の言動や行動による影響についてです。最近産業医として勤務している現場での経験から強く意識したことです。その会社の労務担当者や保健スタッフとは普段から会議や打ち合わせ以外では、雑談などもよく交わしていました。いつものように休憩中にお茶を飲みながらたわいもない話をしていると、色々と普段の活動の中で直面している状況などにも話が及びました。その時つい極論的な事を冗談を交えていたことがあったようです。さほど意識もしていなかったのですが、後日今後の活動計画を立てるにあたり、その極論が計画案の一部に記載されているのを目にし驚きました。その時まで中々活動が前に進まないと悩んでいましたが、確かに振り返ってみると、小ささまざまなことで私の考えや意見が取り入れられてきていました。数百人規模の企業なので私のような非常勤産業医 1 人とのみ契約しているわけで、そのことは同時に会社の中で産業医学の専門家として労働衛生活動に意見を述べ、活動の中心的役割を担う数少ない立場である現実をその時強く再認識しました。私自身まだまだ手探りで活動していると考えていましたが、1 人の産業医として報酬を得て活動する以上、能力や自信の有無にかかわらず社員にすれば唯一の産業医としての存在であることを改めて認識させられました。

少しニュアンスは異なりますが、かつて恩師から私が医局をやめ公衆衛生学に進むにあたり、「お前が目の前の患者さんの診療を行っている間は、まだそれほど周囲に大きな影響を与えないが、社会医学を目指し活動すれば、より多くの影響を周囲に与えてしまうことがあると胆に銘じておけ」とのお言葉を頂戴したように覚えています。お正月で双方ともかなり酔っていたので、私が正確に受け取っていたかはあやしいですが、今回のことがあり、その時のことを思い出しました。この言葉の本当の意味をまだ実感できませんが、最近ずっと頭の中に残っています。

新年に際し気持ちも新たに活動をしていきたいと思っています。今後とも諸先輩方をはじめ様々な方々からのご指導を賜れば幸いです。

ご挨拶

成定明彦 (三菱電機中津川製作所)



東海地方会員の皆様、初めまして。三菱電機中津川製作所産業医の成定明彦と申します。この度、東海地方会ニュースにスペースを戴き、自己紹介をさせて頂くこととなりました。

私は平成 16 年に産業医科大学を卒業しました。始まったばかりの臨床研修必修化に沿ってスーパーローテーション方式の初期臨床研修を 2 年間、さらに同じ病院で 1 年間後期研修医 (一般内科) としてお世話になりました。

私の研修病院は高齢化・過疎化が進む地域で唯一の大きな病院でした。そんな実情もあり、関連病院・施設を含めた同一グループで地域の患者の急性・回復・維持の各期を診る体制になっていました。救急で対応した脳卒中の患者さんを、関連リハビリ病院に回った際に再び診察し、その後在宅に戻ったところで訪問医療として訪れる、という一連の流れを数多く見ました。振り返ると、医療 (特に高齢者医療) の社会的側面・現実を垣間見る貴重な経験とともに、(ベタな結論ですが)「予防」というものの大切さを実感した 3 年間でした。

その後母校 (産業医大産業医実務研修センター) で 1 年間産業医としての基礎トレーニングを受け、平成 20 年 4 月より三菱電機中津川製作所に専属産業医として赴任しました。担当範囲は中津川工場 (約 1000 人) 及びその分工場である飯田工場 (長野県飯田市、約 300 人) です。健康診断・事後措置を始め、主に設計職や営業職の長時間労働対策、製造ラインでの化学物質対策、休職者の職場復帰、また僅かですが日々の診療行為等、幅広い業務に携わっています。専属産業医は初めて、しかも 1 人産業医で赴任当初は戸惑うことも多々でしたが、産業保健スタッフや近隣の先生方、社内・社外の様々な方々に助けられ、目の前のごことをこなしていくうちに気がつくとも 1 年半過ぎていたという感じです。

特に同じ三菱電機で東海地区の富田 (名古屋)、中原 (稲沢) 両先生には折に触れ相談、見学などさせて頂き、お世話になっています。2 人の先輩の活動を見て、最近では目の前の労働者の方々と向き合う形に加え、会社組織全体に関わりを持って効果的に対策を進める形を強く意識しています (特に昨年来の新型インフルエンザ対策を通して感じています)。

新たに見えてきた課題を通して、研修医時代に実感した「予防」の大切さを従業員の方々に伝えていけたらと考えております。未熟者ですが、今後ともご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

新春インタビュー

清水善男先生にきく

産業衛生学会で長年にわたって指導的な役割を果たされ、東海地方会所属の名誉会員でもある清水先生を静岡にお訪ねし、若き日の思い出などを語っていただきました。

清水善男先生の略歴

1926（大正15）年 静岡県生まれ

1949（昭和24）年 東大医学部卒

1952（昭和27）年 国鉄

1979（昭和54）年 清水簡易保険診療所

1981（昭和56）年 三菱電機静岡製作所

日本産業衛生学会では全国理事、法制度検討委員会委員長などを歴任。

大学入学以前



私は1926年（大正15年）1月静岡県の掛川で生まれました。家は、掛川駅から歩いて一里の所でした。庭はひろくて狸が出たり、マムシが現れた

事もありました。

父親は国鉄静岡鉄道管理局で保線の仕事をしていました。浄土真宗の熱心な信徒で、毎朝お経を読んでいた。日中戦争のときは、三島の連隊で、中国に渡り、上海では戦没軍人だけでなく中国の市民の犠牲者も含めた慰霊祭の取り仕切りなどもしていました。私が旧制高校時代、東大時代ともに仏教研究班に入っていたのはそんな父の影響があったからだと思います。旧制高校での仏教研究班の先生のお宅は、三方の壁に書棚があり、一切経など仏教書がびっしり詰まっていた。理科系の学生で入っていたのは私一人でした。東大に入学したのは1945年、終戦の年になります。

東大時代

東大入学は旧制静岡高校からの推薦だったため、無試験での入学でした。ちょうどこの時に日本育英会が発足し、私は国鉄の育英資金も合わせて利用できました。下宿は不忍池近くのお寺でした。そこに、仏典も含め私の本を送ってあったのですが、1945年3月10日の東京大空襲で皆、焼けてしまいました。記憶は曖昧ですが、下宿を焼け出された後、私は東大の赤門の前あたりで拾って来た比較的損傷の少ない畳を持ちこんで研究棟4階で寝泊りしていました。6月頃にはその屋上で、新宿方面に焼夷弾が落とされ、火柱が上がるのを眺めていました。空気が押されるような爆

風を感じました。不思議と東大構内には焼夷弾は落とされませんでした。

セツルメントの経験

1947年に、千葉県の房総半島を襲ったキティ台風はこの地方に甚大な被害を与えました。被災者の救援に立ち上がったのは、理由ははっきりしませんが東大の農学部の学生でした。おそらく関東大震災の時の救援活動の経験が背景にあるのでしょうか。これに東大病院の看護婦が呼応してセツルメント活動が始まりました。私は父親の影響もあったのですが、このような救援活動に心をひかれて医学部の学生でただ一人その活動に加わりました。房総半島南端にある大きなお寺の境内を借りて救援活動を行いました。当時消毒は主に煮沸で、戦前から都市ガスだった東大病院の看護婦たちは七輪で炭火をおこすのに苦労していましたが、田舎育ちの私は難なく火をおこせたことを覚えています。

結核療養所時代

1949年に東大を卒業してから広島県西條にある結核保養所に勤務しました。入院患者が1,000人もいる広大な保養所で、病棟が15くらいあり、医局から遠い病棟に行くのに廊下を自転車で移動したことを覚えています。当時特効薬として注目されていたストレプトマイシンは配給制で簡単には使えませんでした。そんな中、毎日のように亡くなる患者さんにやりきれない思いでした。患者さんたちの宗教的背景は様々で、お経とともに讃美歌も流れていたことを思い出します。

国鉄時代

1952年から1979年までは国鉄に勤めました。静岡鉄道病院にもいたことも、国鉄本社にいたこともありましたが。当時の国鉄は官庁でしたから、だいたい役職の任期は2年くらいでした。本社職員局の安全衛生課長をした時には、現場を知らなければ安全衛生の仕事はできないと思い、実務は課長補佐に任せ、ほとんど本社にいなくて、全国を飛び回っていました。それがその後の安全衛生の活動に役に立ちました。仙台では足元に気をつける、滑って転ぶなど言われました。冬場は地面が凍り、霜柱とともにレールや枕木が浮き上がることもありますが、春になると特にカーブでは平行する2つのレールの沈み具合の違いで保線に気を遣わなければならないと言うようなことも聞きました。春先に地面の氷が解けると地面が沈みます。段差で転ぶ事があるのです。

しかし、同じ事は九州では通用しません。九州では転んで怪我しないようなのは九州男児ではないというような話も聞きました。土地柄の勉強が必要なのです。

こんな事は教科書には書いてありません。教科書に書いてあるのは原則ですから、自分の目で現場を見る以外に具体的な方針を立てることはできないのです。むしろ現場の作業者に知っていることでも知らないふりをしてきくくらいの方がよくわかるものです。静岡鉄道管理局の産業医としての活動も行いました。丹那トンネルから豊橋まで、飯田線、二俣線、身延線、大井川鉄道などもありました。1 万人近くの健康管理をしていました。気候風土、ものの考え方などは動き回って初めてわかりました。

次代に期待すること

三菱電機退職後は静岡産業保健推進センターにもい

ました。静岡県ではこの 50 年間に 5,800 人が仕事で命を落としています (図参照)。私がいた国鉄では保線の作業者が田子の浦の公害でたまったヘドロから発生した硫化水素で倒れたこともあります。最近出た安全衛生関係の集まりで、労災で亡くなった方々への黙とうが省略されたときには、私などはつらい気持ちになりました。働く人たちの命や健康を守るためには何よりも彼らのありのままの姿をとらえることが大切です。現場に立って考える、他社等の活動に学ぶ、外国人など弱い立場の人々を思いやる、東海地方会でもそんな活動が育つことを期待しています。

(聞き手：柴田英治、久永直見)

静岡県における業務上死亡災害の年次推移(清水善男作成)

性別・災害内容・業種・作業は不明
「労災認定された過労死」303件の統計への計上の有無は不明



これからの行事予定

第 6 回東海地方会産業医部会懇話会

日 時：平成 22 年 6 月 19 日 (土) 14:00 ~ 17:00
場 所：中部大学名古屋キャンパス 5F
主な内容：産業医を対象とした職場を見る目の向上と改善提案の実践のためのグループワーク
定 員：30 人

平成 22 年度東海地方会

総会並びに研修会

企画運営責任者：山田琢之 (栄内科・なごや労働衛生コンサルタント事務所)
日 時：平成 22 年 6 月 25 日 (金) 9:30 ~ 17:40
場 所：東建ホール・丸の内
教育講演 1：職域における過敏性腸症候群の基礎知識と対応 金子宏 (藤田保衛大教授)
教育講演 2：働く人の生活習慣病予防 (仮題) 廣部一彦 (みずほフィナンシャルグループ大阪)

教育シンポジウム：産業保健分野への人間工学の応用
 ー産業医の継続的かつ体系的な育成に関する研究よりー
 榎原毅（名市大）
 赤津順一（中電浜岡）
 坂元仁之（日産自動車）

平成 22 年度東海地方会学会

学会長：巽あさみ（浜松医科大学医学部看護学科地域看護学講座 教授）

日 時：平成 22 年 11 月 13 日（土）

場 所：浜松医科大学

特別講演：職場のメンタルヘルスー最新の効果的な復職支援のあり方ー 廣尚典（産業医大）

シンポジウム：職場のメンタルヘルスケアー事業所内産業保健スタッフ「力」、もっと結集できないか？

会員の異動（2009.11.1～2010.1.31）

(1) 新入会

- 愛知①服部和彦（東海鋼材工業）
 ②長谷川真美（日赤豊田看護大）
 ③金子弘史（東海旅客鉄道）
 ④大山美果（東海旅客鉄道）
 ⑤佐藤寿一（名大）
 ⑥西口健二郎（西口整形外科）
 ⑦松葉泰昌（あまの創健）
 ⑧折付祐子（豊田通商）

静岡①上原明彦（ヤマハ健康管理センター）

- ②武田弥千代（富士フィルム）
 ③松嶋真智子（聖隷福祉事業団）
 ④中西湖雪（聖隷健康診断センター）
 ⑤伊藤亜由美（聖隷福祉事業団）
 ⑥平野幸子（聖隷福祉事業団）
 ⑦谷伊織（浜松医大）

(2) 転入

愛知①井谷徹（外国より）

(3) 転出

愛知①長谷川久美（協立総合病院）（九州へ）
 三重①高田未里（三重大）（関東へ）

(4) 退会

- 愛知①立川壮一（和合病院）
 ②伊藤康宏（藤田保健衛生大）
 ③杉山かをり（城山病院）

- ④浄土魏（じょうど医院）
 ⑤坪井信二（愛知県健康福祉部）
 静岡①小澤久代（NTT 西日本東海健康管理センタ）
 ②中安いくよ（静岡健康管理センター）
 岐阜①長屋明美（ソニーイーエムシーエス）
 ②田代美代子（岐阜県産業保健センター）
 (5) 地方会内転入出
 岐阜→愛知①河邊昌信（松下エコシステムズ）

地方会理事会

2009 年度第 3 回理事会

日 時：2009 年 12 月 12 日（土）10：00～12：00
 場 所：中部大学名古屋キャンパス 5 階 501 講義室
 出席者：33 名

【議題】

- A. 前回議事録の確認
 B. 報告事項
 1) 本部報告事項 2) 地方会事務局報告事項 3) 平成 21 年度地方会学会開催報告 4) 第 24 回産業保健スタッフのための研修会準備状況 5) 愛知県医師会産業保健部会報告 6) 平成 22 年度総会並びに研修会準備状況 7) 平成 22 年度地方会学会準備状況 8) 地方会部会報告 9) 地方会ニュース 10) 関連学会・研究会開催報告 11) 今後の学会・研究会等 12) その他
 C. 協議事項 なし

編集後記

今年度は 2 回の発行となりました。地方会での出版メディアとして、長年東海地方会誌が年 1 回発行され、地方会活動の記録としての役割を果たしていました。しかし、地方会ニュースとの重複が多いことから平成 17 年に廃止されました。先日の理事会でも指摘がありましたが、地方会誌がなくなった現在、地方会ニュースの記録としての役割が大きくなったといえます。

一方、東海地方会はホームページを持っていて、近く開かれる研究会の情報などは簡単にアクセスできる環境にあります。しかし、現実には郵便物など紙媒体での宣伝の有効性が依然として高いことも事実です。

様々な状況の変化を踏まえて地方会ニュースも当面の間は進路を模索しなければならないのでしよう。(柴田)